日本文学全集
31

尾崎一雄・上林暁
永井龍男

暢気眼鏡・虫のいろいろ・まぼろしの記
薔薇盗人・聖ヨハネ病院にて・白い屋形船
黒い御飯・一個・皿皿皿と皿・青梅雨・他

河出書房

918
カ

尾崎一雄・上林暁・永井龍男

カラー版日本文学全集　31

1969©

昭和四十四年十月二十日　初版印刷
昭和四十四年十月三十日　初版発行

定価　七五〇円

著者　尾崎一雄　上林暁　永井龍男
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表)　振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331113-0961

目次

尾崎一雄

二月の蜜蜂……七
暢気眼鏡……一三
父祖の地……二一
痩せた雄鶏……二七
虫のいろいろ……三九
美しい墓地からの眺め……四五
まぼろしの記……五三
夢蝶……八五

上林　暁

薔薇盗人……一〇三
ちちははの記……一〇九
現世図絵……一二〇
聖ヨハネ病院にて……一二四
嬬恋い……一五一
滞郷記……一六六
小さな蠣瀬川のほとり……一七五
春の坂……一八六
白い屋形船……一九二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

永井龍男

黒い御飯……二〇一
絵本……二〇三
朝霧……二〇五
青電車……二一六
蜜柑……二二三
一個……二二七
皿皿皿と皿……二三二
冬の日……二八四
青梅雨……二九三

注釈　保昌正夫　三〇一
紅野敏郎　三一〇
年譜　三三
解説　浅見淵　三四一
巻頭写真　榊原和夫
色刷挿画　田村孝之介
暢気眼鏡
痩せた雄鶏
まほろしの記
夢蝶
伊原宇三郎
薔薇盗人
聖ヨハネ病院にて
春の坂
木下孝則
馬い御飯
蜜柑
皿皿皿と皿

尾

崎

一

雄

二月の蜜蜂*

二月末の気候は、冬と春とのしつこい闘争から、ただでさえ私の心持を陰鬱にする。それが、三年前から決定的なものになった。――一年の内のこの時期に、決って私の感情が病むのである。二年前の二月末、美枝の一周忌に近い或夜、私は遣場のない憤りを圧え圧え、片意地に端坐を続けた。

私は、血走った眼と蒼白な顔とを以て、今朝相模灘の波に生まれた太陽を冷たく嘲笑った。そして、徹宵走り書きの筆を青畳に刺した。

その時の短篇――

*　*　*

隣の家で蜜蜂を養っている。十一月の頃冬籠り、年を越え、春近い此頃になると、風の無い晴天にはぞろぞろと巣から這い出し、或者は未だ乏しい花の香を求めて飛び立ってゆく。巣箱の下に付いた出口の辺には、背の光った老蜂や、まだ幼くて虎斑のはっきりしないのなぞが、思い思いに這い廻っている。何をするのでもないらしい。中には近々と顔をつき合せ、何か思いに沈むように凝っと動かずにいるものがある。私はよく巣箱の前に蹲んだ。二月の陽を弱々と背に受け、よくぼんやりと考え込むのであった。

「面白いでしょう。見ていると」

主人のY氏が巣箱の一つに纏われた古俵を取り除け乍ら声をかけた。冬籠りを解かねばならぬ時期なのだ。

「ええ？　――ええ」またかんがえ込んでいる、そう思い、意識を蜂に向けるのだった。――無暗に後じさりをしている奴がある。そいつは後じさりしながらとうとう巣に入って了った。

「ここへ来てごらんなさい、煽風をやってる」Y氏が云った。

巣の入口に二十匹ばかりの働蜂が不規則に並び、一斉にこまかく羽根を動かしている。尻を上げて外に向け、も少し強く動かしたら飛び立ちそうな恰好なのだ。

「うまいことをやるでしょう。換気法なんです」

暫くして煽風は終った。みなぞろぞろと中に入ってゆく。と、それと入れ違いに一匹の蜂が斃れた同類を引いて出て来た。そうして、一寸身構えたと思うとそれを腹の下に抱えてぶーんと羽音をさせて飛び立った。巣の掃除を始めたな、私は思った。年老いて斃れたものは、こうして外に運ばれ、相当の距離の所で空中から落される。それはY氏から聞いて知っていた。役に立たない老蜂は、若い者たちが嚙み殺して了う、働いて働いてその果に自分達の子孫の手で殺されて了うのだ、それもきいていた。だが、殺された彼等は、兎に角為すべきことをして了っているのだ。二十で死んだ妹の美枝は――私の考えは、ともすればそこへと落ちて行くのであった。

大正十一年一月の、近年に珍らしい寒さだと云われた或朝、私はO町の登記所へ出掛けた。胸部の病が再発したため、思い切って学校の方を一年休むことにした、その間のことである。身体は、まだ安心というところまで行ってはいない。だが、二年前の冬突然父を喪って了った一家にとっては、病気に障ることを知っていても、止めることの出来ぬ用事であった。

寒い。四五日前に降って解け切れぬ雪が、轍や下駄の跡をそのままに凍っている。襟巻に深く顔を埋めて急ぐ朴歯を、雪は鋭くはねかえした。

ふと、うしろに固い靴の音を聞いた。中学生か、私は思った。それにしては時刻が早い――ぼんやり考え乍ら、足は急いでいた。

「兄さん」と云ったようだ。変な声だな、と思う。振返ると朋子なのだ。赤い頬に泪が流れている。はてな、と思った。殆んど無意識に「どうした?」と云ったが、頭には直ぐ病みほおけた美枝の顔が浮んだ。

「姉さんが、何んだか、変で――」切れ切れに答え、口の横の筋肉をぴくぴくと震わせている。

「そうか」

「直ぐ、帰って下さいって、お母さんが」

やはり切れ切れに云うと、左手を挙げ小鼻のところに流れた泪を払うようにした。その手に、べっとりと血がついているのだ。

「どうした」眉のあたりを嶮しくし、眼でそれを指し示すようにして、私は云った。

「城前寺のところで、雪の上に、ころんでしまって――」あとは何か判らぬ震え声になり、顔を伏せ、差し出した手のひらが一寸程の長さに裂けていた。

これは少し酷すぎる、と思った。いい加減にして貰いたいものだ、おとなしくしているからとて余り莫迦にするな。――私は暫く立っていた。泣声を立てまいとしてのどに変な音をさせている十五の妹の震える肩を右手で押え、私はそこに立っていた。無意識のうちに、戻ろうか戻るまいかと考える風をしていたかも知れない。だが私はその時、只腹が立っていただけだった。得体の知れぬ何物かに対して、実にしんから腹を立てていたのだった。

「帰る訳には行かない用事だ。お母さんだって知ってるだろうに。死目に逢えなくたって為方がない……、それでおまえはな、やっぱり帰らずに学校へ行くんだ。学校へ行って早く校医にでも誰にでもいい、手当をして貰うんだ。いいか、女学校は直ぐそこだから、放っといてバイ菌でも入ったらまた困る……。泣かないで行くんだ」そんなことをぶつぶつと私は云った。

急激な寒さの為に発作を来した美枝は、其日の午後になって、先ず安心の出来る容体になった。その頃から私自身は徐々に健康を取返し始めていたのであった。右肺尖のラッセルは去った。が、美枝の容体は、三月に入っても好いと云う方に向わなかった。つまりいけないのか、ふっとそう思うことがある。そう思うと、私は一寸息をつめる。身動きをしない。身動きしたらやられる、そう云う気持なのだ。そんな筈はない。死んでたまるか、と心できっぱり宣言する勇気が今は私に無いのだ。父の突然の死、私の思い掛けない発病、それらの経験から、筈はない、などとの胡麻化しは通用しなくなっていたのである。

美枝は三月十八日に二十歳で死んだ。*

腎臓炎が進んで尿毒症*となり、死ぬ半月前には頭が変になっていた。毒素は顔面神経を冒し、特に強度の近視だった視神経が酷かった。何か途轍もない言葉を妹から投げ付けられ、私は無残にへたばることがあった。

「逆さに歩いちゃ厭よ、兄さん」

こう突然云われて、私は黙り込んだ。静かに美枝の視野から身を外し、私は長い間考えた。

「痛い、痛い、痛いんです!」

疲れ切って、殆んど眠っている感覚が、只苦痛に対してのみ働く。身悶えする力が無く、唇を右の方に引つらせて、「死にたい」と云った。

父の死を思う時、私は妹の死から受ける程のショックを感じない。父が相当の年配であった故、死に就て自ら考え、或程度まで自ら解釈し得ていたろうと思うのである。父にはあらゆる苦しみを自ら負い得る力があった。然るに美枝の苦しみと悲しみとは、その総てを私が負わねばならぬ。――

美枝を追想することは、いけない。私の後天的性質、変にものを見凝めたがる癖も、美枝に対しては力が無い。その回想が浮ぶ度に私は頭を振る。思わず振って了うのである。*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あんなにも死ぬのを厭がっていたのだ」そして婚約まで出来ていたのに――こう思ってくると私はカッとなる。眼に見えぬ、無法極まる何物かに対して、猛然とつかみ掛ろうとする。

Y氏は、巣箱の上蓋を取って、蜜の工合を調べている。

「騒ぐなよ」そんなことを云い乍ら、静かに蜂巣を一枚一枚と抜き出して調べている。

「少し御機嫌が悪い」

見ると、三四匹の蜂が、鋭い羽音を立てて、Y氏の頭の辺に付纏っている。やがて調べは済み、Y氏は手帳に何か書き付け始めた。突然手帳を持った左手が、額のところを払ったと思うと、Y氏は顔をしかめて、「やられた」と云った。

「何しろ命がけで刺すんだから――」と云いかけ、菜園をへだてた住居の方を向くと、気持の好い中音をひびかせた。

「オーイ、やられたんだよ、早くアンモニアだ！」

陽当りの好い縁側に、赤い色の多い縫物を拡げていた若い細君の姿が、ハッと立ち上った。

「滅多に刺しはしませんよ、一度刺せば刺針をなくして死ぬんだってことを先生達知ってますからね。それだけにまた刺されると――やア痛いですよ」

Y氏は、手探りで自分の額からそこに残された刺針を抜きとると、見ろ、と云う風に私の前に差し出すのだった。私はそれを掌に受けた。根元に白い肉を付けた一分ばかりの刺針が微かに動いている。気をつけて見ると、母体を離れたその刺針の先は、微動する度に、極めて僅かずつ、掌の皮を破って潜入してゆくのである。

私はそれに見入った。（大正十二年二月）*

*　*　*

それが善いことか悪いことかは知らず、今私は妹の追憶から、あの蜜蜂の刺針の一撃に比すべき性急な痛みは感じない、時が自然にそうして呉れたのか、知らず識らず自分を処理し得たのか、それさえ今は問おうとしない。二年前、この短篇を書いた頃、私は――うなっていた。が兎も角、今の私は静かだ。静かに美枝を憶う。私はもう頭を振らない。嘗てはきりきりと振った――が、今は振る必要がない。三年経って美枝も落付いた、そう感ずる。私の頭の中で、美枝は此頃自由な起き伏しをする。そしてその姿を、私はおだやかな顔付してみまもるのである。美枝のその自由な立ち居の一つに――

八年前のある朝*。

時計がギイと云う音で七時打つ前知らせをした時、私は厠にと立った。登校前に用便をする、それが習慣として私達に守られていた。

廊下の角の柱に凭れて、美枝が浮かぬ顔をしている。

「やいバカ。どうしたんだ？」

「どうしもしないわ」元気のない声だ。おかしい、美枝がおとなしいぞ、と私は思った。

「早く学校の支度をしろ」

「もう、してある」

「バカア」

云い捨てて、当時流行ったティッペラリイ*と云う唄を口笛に乗せ乍ら、私は厠へと躍進した。小生意気な中学生だったが、妹にはよい二つ上の兄であった。勢いよく廊下とのしきり戸を開けると、更にもう一枚開け放たれた中で、母の身体が動いている。私は止まった。バケツを引付け、そこを掃除していた母がいつになく恐い顔を振り向けて、

「下のへお往き」と強く云った。調子から、何かそうしなくてはならぬものを感じさせられ、私は素直に引返した。廊下の角にはもう妹はいない。下の厠で、いつものように懐に入れて持ち込んだ「新小説*」を、とうとう読まずにしまった。

用を済まし、茶の間に入ってゆくと、何かぼんやりした顔で母が坐っていた。私を見ると、

「硯はどこだったか――」とあやふやな云い方をした。
「持って来ます」
知っていたから、次の八畳にそれを取りに入った。すると、そこに床が敷かれ妹が寝ているのだ。
「なんだ？」私は云ったが、美枝は答えなかった。
母は手に持った巻紙に筆を走らせている。ああ早くは書けないな――私はズボンに片足ずつ突込み乍らそれを見ていた。妹の欠席届だ。
「少し廻り道だけれど、これを女学校へ持って行っておくれ」
「医者へも廻りましょうか」
「お医者さんはいいよ」
母は私の顔を見た。そして両肩をほうと落すようにし、
「美枝も女の身体になった。――遅いから、どうしたかと思って案じられてならなかったが……ずっと調子よくいって呉れれば好い」と云った。終いの方は、独り言のように聞きとれた。私は黙っていたが、突然、
「行って参ります」と立上った。……
後、妹の普通でないそのことで、母がずっと悩まされ続けたと云うことを、美枝が死んでから聞いた。莫迦でなく、勝気でもあったが、身体つきはいつも弱々しい美枝であった。
それから――
四年前の二月半ば、美枝が女学校の補習科に通っていた頃、大雪の一里の道を途中まで迎えに行ったことがあった。
「本庄へ行って頼子さんは帰ったか訊いてみるか」
そう云う母は懐爐の古灰を火鉢に落し落ししかめつらをしている。意外の大雪になった。母も今は学校に出してやったことを、私と一緒になって後悔した。雪の明るさはあるが、時計は五時を過ぎている。
訊きにゆき、本庄で娘を休ませたと知った。母は慌て出した。
「重吉を呼んで迎いにやるか」気が気でないと云う風に、母は出入りの作男*の名を云った。
「そうですね」
曖昧な返事をする。何故か重吉をやりたくない気がするのだ。小柄な癖に遅鈍な若い作男の顔を私は思い泛べた。
「私が行きましょう」と云った。母もそれを望んでいるのに違いない。
「お前が行って呉れれば――」安心だと云う顔を母がした。
――一尺に余る雪を踏み、人通り稀れな田舎道を私は辿った。目に慣れた平凡な景色がまるで珍らしい絵となって展けている。美しい。然し同時に変な凄さがある。眼の届く限り全く灰色に埋れて、真近い箱根足柄の連山さえ、小止みなく降る厚い幕で遮られた。何故ともなく時々振返りたいのだった。思わず振返る。すると、一面の灰色の中に、自分の足跡だけが覚束無気な陰影をつくっている。
約半道を往き妹に出逢った。十間程向うに、傘を肩に捲きつけるようにさしかざし、小きざみに来る姿を見付け、直ぐに美枝と感じた。木目模様の合羽の紐が解け、その間から紫紺の袴を蹴出し乍ら一足一足とやって来るのだ。「よし、おどかしてやれ」私はマントの頭巾をグイと前のめりにすると、そっぽを向いてやり過ごした。すれ違う時、向い風の妹は一寸顔を上げたが気付いた様子がない。占めたと軽い気持で、一二間後から「オイ」と声を掛けた。立止って振り向く。つかつかと寄って行き、笑いながら「判らなかったな」とやさしく云ってやった。
「だって……」と変な笑顔をしたが、それが見る見る泣顔になって行った。そして、身体は崩れるように、私の胸のところに倒れかかって来るのだった。
「なんだ、泣く奴があるか！」
云ったが私も一ぺんに泪ぐんだ。気抜けした美枝の身体は重く、私はそれを支えて暫く動かなかった。
「疲れたろう」

美枝はないじゃくりをする。*
「歩けるか？　ええ？」
微かに合点をした。
自分が着ていた黒の男マントで美枝を包み、美枝の傘を私がさした。傘はこわれている。右手で美枝の左腕を深く抱え込み、私は歩き出した。四五町を黙って私達は歩いた。妹は大分大儀になって来たらしい。
「なんだ、これくらいの雪にへこたれる奴があるか」故意と大声だ。
「けれども何だろう、今日大勢休んだろう」
「ええ、半分位」
「本庄の頼っぺエもずべったな？」*
うなずいた。暫くして、
「吉田先生が、土岐さんは遠いから、妾のところへ泊ってらっしゃいって云ったけれど……」と云った。
「泊ってなんか来られたら尚心配だ」
「だから先生も、無理には、泊めないって……」
すると、云っている美枝が、不意にがっくりと膝をついたのだ。膝が雪に埋まった。はずみを喰って私はよろよろとした。「しっかりしろ！」そう云う私の声が少し上ずっている。これは本気でなけりゃいけない場合だぞ、第一に慌てちゃあいけない、私は思った。美枝が立上ってのろのろと歩き出す、その歩き方が変なのである。
「よし、おぶってやる。おぶさるんだ」
私は屈んで、頑張って、背中を出した。
「さァ来い」妹は直ぐおぶさった。
「大して重くもないな、十貫か、十一貫か」何んでも好い元気らしく怒鳴れ、と思う。
「お礼はあとで、たんまり貰うよ」
「こう云うところを写真に撮っときたいもんだ」無闇と怒鳴った。
やがて私も黙った。少し疲れたが足はゆるめなかった。濡れてもいいと思い、私は傘を背後に廻し、それに両手を掛けて妹を支えた。美枝の尻を抱えた右手が痛んで来たのだ。
風が少し強くなった。兎に角急ぐのだ。早くこの雪から逃れなくてはいけない、と切りに考えられた。風は突然起って雪面を蹴る。すると粉雪が慌てて捲上がる。私は来る時に自分が付けた足跡の、今はもう消えかかったのを、もう一つ、もう一つ、と云う風に辿った。——
美枝はそれで一週間ばかり病臥ついた。その頃から目に立って弱くなり、一年の後死んだのである。

最後に——*
十日程前、曾て妹の親友だったK子と云う娘が死んだ。
美枝が死んだ時、母の望みで、親友なる二人の少女に、ささやかな記念の品を贈った。
「あんなに仲よくして頂いて——」と私の顔を見、「なにかあげたい」と母が云い出した時、即座に私はその買物役を引受けたのであった。母の云いつけ通り、東京の或デパートで、華やかな色した縮緬の帯揚を二筋買った。
頼子とK子の二人、も一人の美枝が居ず、その姿は何か歯の欠けた感じなのだ。二人を見る母の表情は露骨過ぎるのだった。
そのうちに、母がこんなことを云い出した。
「頼子さんは、この頃わたしに会いたがらない。逢ってもすぐ別れたがる。変だ」
私は「変ではない、よく判っています」と答える代りに、「そうですか」と云った。其後母は、その少女の母親から、「頼子は土岐の小母さんの顔を見るのがつらいと云っている」ときかされ、泪ぐんだ。
——美枝を埋めた当座、その墓前に朝々一束の花が捧げられてあった。人知れぬその供え主を母は知りたがるのだった。朝寝の私が二三日早起きをつづけたが、露を帯びた花束は、すでに新しい墓標の前に活々としていた。昨日は桃、今朝は薔薇——誰だろう？　頼子、K子、

或いはまた――私は美枝の約婚者の顔を淋しく心に描いた。

或夜私は眠らなかった。そして期待を以て、白い朝霧の路を墓地に急いだ。

K子が立っていた。

その姿は白い墓標を前に、紫がかった夜明の大気でしっとりと霑うて見えた。私は静かに近寄った。K子が振り向き、見つけられたと知って顔をあからめた。

頭を下げ、「有難う」と私が云うと、

「いいえ」と小さく受けて、足早に其場を去った。

そのK子が十日程前に死んだ。やはり二月だ。秘かに美しいと私が思っていたK子が二月に死んだ。来年の二月にも、また蒼白い何かが待っているのではないか、そんな気がする。私自身に就て云えば、長い胸部の疾患も殆ど退治し得た。今、春浅い庭に下り立ち、快癒期の心に、こまごまと咲く梅の白さを感ずる、匂いをかぐ。二三年前のように怒号はしない。だが――二月故、淋しいのだ。所詮二月は碌な月でない。そして又私は、当分の間あの蜜蜂の巣箱の前で、蜂共の早春未だ時を得ぬ不安気なうなりを聞き、ひょろひょろと自信無気な歩き廻りを見乍ら、愚痴な時を過ごすのではないか、とそんなに思えるのであった。

（大正十四年二月作　大正十五年九月改作*）

暢気眼鏡*

一

「ちょっとオ」とか「これよ、これ」とか云う芳枝*の声を、「うるさいな」と思い思い私ははっきりせぬ夢から抜け切れずにいた。が、直ぐ覚めた。朝だ。芳枝が、薄眼で呆然している私の鼻先に何か光るものを突きつけて、

「これ」

「何だ」見ると金色の妙な恰好したものが、私には何か判断がつかなかった。

「これ、一寸壊れてるし、あると歯が痛いから除っちゃった」

入歯の金冠だなと思うと、私は全く眼が覚めむっくり起き上ろうとしたが、止めた。ちらと芳枝の顔を見やり、夜具を鼻の辺まで引き上げ、又眼を閉じて了った。私には一寸何も云えなかった。「態を見ろ」と何かに云われていると感じ、「判ったよ」と反撥的に頭の中であたりを見廻すのだった。するといろいろの顔が浮ぶ。「死ね」と泣き乍ら云った母。「元の兄さんに返って下さい」と手紙を寄越した妹――すでに四年も見ない顔だ。一月程前、雑司ヶ谷にいる芳枝の姉に、自分達のことを事後承諾させに行った時、「承知不承知なぞとわたくしにはもう――。ただ、あれは一人の妹ですから、先々人並の生活だけはさせてやって頂きとう存じます」と云われた、その姉の教師らしくないやさし気な眼付き――「もういい、もういい」と苦笑いするのを

追いかけて「俺も居るぜ」と顔を出したのは友人のSだ。一週間程前、金借りに行ったが度々のことで断わられ、私がふくれ面しているとSが改まった顔付になり、「君はどうしても僕とこから持って行くつもりかね」とゆっくり云った。私は全然居直った形*でSを見返すと、「為方がないんだ」とふてぶてしい声を出した。Sは、蒼い顔で暫く黙っていたが、「じゃあ、為方がない」と云うなり立ち上ると押入をガタンと開け、行李の中から和本二三冊取り出して私の前に置いた。

「足りまいが、これをどうにでもして貰おう」

手にすると、国芳あたりの春画本だ、私はそれを膝の前に置き、暫く考え込んだ。やがて割に平気な顔で「有難う」と云った。が云って了うと、不意に激しい感情に襲われた。図太い張りが消し飛んで了ったのだ。

「僕は、どんなに恥を掻いても、今、為方がないんだ。絶対に今金が無くてはいけないのだ。出来れば泥棒でもする。君に云ったところが判りっこはない、君がそっくり今の僕になって見ない以上は。だから、腹でどんなに罵倒されていようと僕は関やしない。その覚悟は初めからしているんだが――」云っていると、眼前のSを忘れ、自分だけの感情から意気地ない泪を浮べて了った。Sが其の時どう云う顔をしたかは覚えぬ。後で碁を打ち、双方気持を取り戻して別れたのだが……。

芳枝が、

「これェ、要らないんだけど――どうする?」

「どうするったって――」と向き直ったが、此場合怒った風をする外ないと思われ、

「なぜ君はそんな莫迦なことをするんだ。その歯、そんなにして、当分治せるあてはないじゃないか」怖い顔をして見せた。芳枝は気押された様子だったが、まだ私の気持をうかがう風は捨てず、独言のよう、

「これ自分で売りに行って、ドラ焼買おう」と云った。私は返事をせず、尚もみじめな自分の気持を小突き廻していた。*昨日の夕刊に、或時計店の広告ビラが折り込まれていて、金大暴騰、一匁に付純金いくら十八金いくら、今が売り時、とあった、それを見ての思い付きに違いない。自分の喜ぶことを予定している様子なのが気にくわなかった。或はそれはも一つ屈折して、自分の気持を軽く運ばせようとした芳枝の心遣いかも知れぬ。それなら更に不愉快だと思った。二十やそこらの子供にいたわられては堪らぬ。やはり持前の単純暢気さから、金無くてむっとしている自分を喜ばせる気でやった事だろう。この方なら気に喰わぬ乍らも、此の場合負わされる所まだ多少軽くて済む。――然し可哀そうな奴だ、と主我的な気持に余裕が出て来た。そう思うと、気持はずっと芳枝の方に流れ、私はまた違った意味で弱り切った。顔付を柔らげて、

「無い方がいいんなら除っちまってもいいけど、あとどうかな。だけどもう片方のやつはこわれてないんだから、また俺の寝てる間に除ったりしちゃ駄目だぜ、今度は本当に怒るよ、いいか」

「うん」と急に嬉しそうな芳枝の顔を残し、も少し寝ると夜具を頭からかぶった。

午近く行きつけの質屋へ出かけ、金冠を見せると十八金七分と云うことで、四円いくらかになった。溜っている利息に呉れと云うのを持ち帰って第一に米を買った。嘗て聞いた、貧乏し切って何も彼もなくなり、金歯を入質して米を買ったが、それを喰う段になり弱ったという笑話が苦々しく憶い出された。

二

芳枝と知り合う前のことを簡単に書く。

三年程一緒にいた妻Eと、私に収入のないことから不和になり、加えて郷里の母との間の鬱積した関係が極度に達した時、何も彼もが面倒になって私は不意にN市へ走った。N市には私の尊敬する芸術家*が居るのだ。N市へ行ってその人の顔を見、声を聞いたら切れそうな

呼吸も落ち付こう、ただそれだけの望みしかなかった。Eは行く先を知って居たが、郷里では知らず、のち使の者がEの所へ来て判った。母はあきらめ、一つには行き先が先故多少私の気持も考えたらしく、後追うのを止めた。云い忘れたが、私は父が早死した家の長男で、老いた母と三人の弟妹を世話しなければならぬ身の上なのだ。家計のやり方に就て母から不服を云われ、云われて見て自分の悪い点を認めたが、母がそれのみ責めたことから私はつむじを曲げた。そして現実に家の経済は破局に近付き、それを捨て置いてのN行だった。

N市に居着いて、気持では郷里のことから可なり離れることが出来た。行く処まで行ったからだ。が、妻に関してはまだ処理し切れなかった。N行に際し、私はKと云う友人に「あとを万事お願いする」と云い置いたのである。それを云う時、卑怯かな、と多少思った。が、止むを得ないのだとも思えた。Kは私にもEにも古い友だが、一時互の居所の距りから行き来間遠の頃があった。その間に私とEとの間はひどい不和になっていた。Eが以前やっていた商売をまた始めると云い出し、私も賛成して市内の旧居に帰ってからは、Kもよく来て世話を焼いて呉れたが、第一に私とEとの不和に驚き心配して呉れた。粗暴な私は、すでにその頃口で云うことを止め、Eをよく殴った。或時はEの左鼓膜の破れたのに気づかず、翌朝鏡に向って、かわいた血に驚いたことがあった。KはEに同情した。それが段々と育って行き、Eもそれを感じ始めたと知ってから、私は余りEを殴らなくなった。そして、私とEとの間は冷え切って了ったのだ。

N行の支度のことでEと気まずい口をきき合った時、私は顔は真面目に、冗談らしい調子で、「俺が行って了えば勝手にしていられるんじゃないか、まアふくれるな。俺は鉾をおさめるぜ」と声だけで笑った。

「何おっしゃるの」Eは云ったが、私は云う顔付を見ようともしなかった。Kにはああ云ったし、これで片づこう、そう思った。

N市の、現実に妻の顔見ぬ生活では、Eに対して倦き切ったと見えた私の気持にも、予想通り多少のゆるみが来た。Eを哀れな女と思えた。が、二三カ月して私の動揺も静まった。八カ月目に帰京し、直ぐ妻との間を決算した。EはKの妻になり、郊外に家を持った。

三

一人になって一年後、昨年の夏、K市から初めて東京に出て来た芳枝と知り合い、一カ月のつき合いの後、事実上の結婚をした。

私に母や弟妹を捨てさせ、妻を去らしめたのは直接には金の問題だが、根本は私が小説を好くことにある。私としては普通の世渡りの成り難い程元来偉くも莫迦でもないと密かに思っているのだが、いつか小説好くことの深みに陥り、父の遺産が無くなって気付いた時は遅かったのだ。世を渡る術の足場は全で失い、余裕あるころその方向への心構えは捨てて顧みなかった故、あらゆる意味の空手で、追われても走る気力のない野良犬、先ずそんなものだ。一人になった時、それでいいと思った。もとよりなかなか気に入ったものが書けるとは思わず、書けてもそれで世間並にやって行く望のないことは前からの覚悟故、自分一人で困っていれば済むと気楽だった。再び結婚はすまい、腐れ縁の古女房が居るのだと小説のことを考え、事実N行以来書けそうに思えて来たのであった。

芳枝に好意を持ち、芳枝の肚も判った時、私は当然躊躇した。然し、それを飛び越えて了った。芳枝のすなおに示す感情の美しさに挫がれたのだ。が、一方、また此の女を苛めるのかと自分を咎めぬわけにゆかなかった。その気持は、芳枝が若く、何も知らぬ暢気な娘と思えた故、強く来た。

四

居る所は汚い下宿の六畳で、机、本箱、空箪笥を並べ、コンロを廊下の隅に置いて自炊生活だ。宿主は、為事が片付けば纏めて払うからとの私の言を信じ切れぬらしく、食事持って来ることを断わったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com